

淡路島の人形浄瑠璃と身心変容技法

京都大学こころの未来研究センター

特定研究員 奥井遼

目次

- 0. はじめに
- 1. 人形の三人遣い
- 2. 人形操作の稽古場面
 - 2-1. 足遣い
 - 2-2. 左遣い
 - 2-3. 頭遣い
- 3. 三人遣いの身体論

0. はじめに

本発表の概要

対象...人形浄瑠璃における人形遣いの「わざ」

目的...「三人遣い」を、身心変容技法の一つと見なし、その「わざ」の習得の仕方を明らかにする。

背景...教育学研究における、「わざ研究」の未発達。
人形浄瑠璃の研究における、「人形遣い」の欠落。

方法...稽古場面の観察、哲学的身体論による分析

淡路人形座浄瑠璃とは？①

1500年代初頭に成立...神事(三番叟・戎舞)を得意とする芸能集団(エビスかき、傀儡師)

江戸時代、阿波・蜂須賀藩の庇護の元、淡路島島内で40の座が活動。野掛け小屋にて全国で興行。(上村源之丞座、市村六之丞座、吉田傳次郎座など)植村文楽軒が大坂にて興行、「文楽」が成立。



淡路人形座浄瑠璃とは？②

1500年代頃に成立...神事(三番叟・戎舞)を得意とする芸能集団

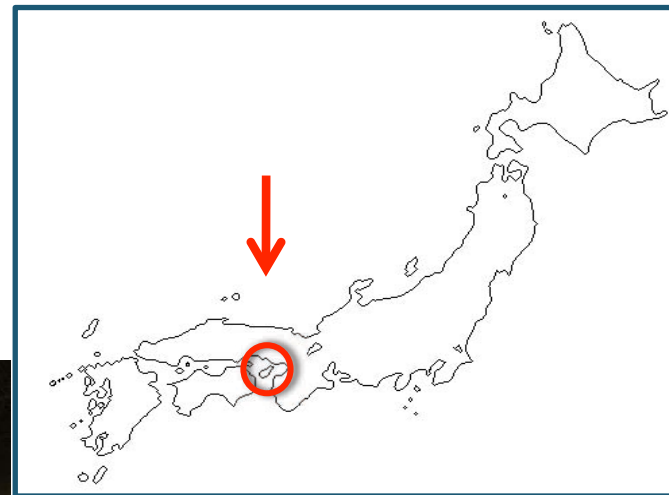
江戸時代、阿波・蜂須賀藩の庇護の元、淡路島島内で40の座が活動。野掛け小屋にて全国で興行。(上村源之丞座、市村六之丞座、吉田傳次郎座など)植村文楽軒が大坂にて興行、「文楽」が成立。

明治から昭和にかけて衰退。昭和30年代後半以降、淡路人形座に統合。細々と活動を続ける。

昭和40年代後半、地元の有力者たちが奔走。淡路人形協会を設立。昭和60年、座員の準公務員化が成立。後継者の確保に成功。

淡路人形浄瑠璃とは？③

現在、座員19名にて活動
(大夫・三味線9名、人形7名)



1. 人形の三人遣い

三人遣いの役割

頭遣い

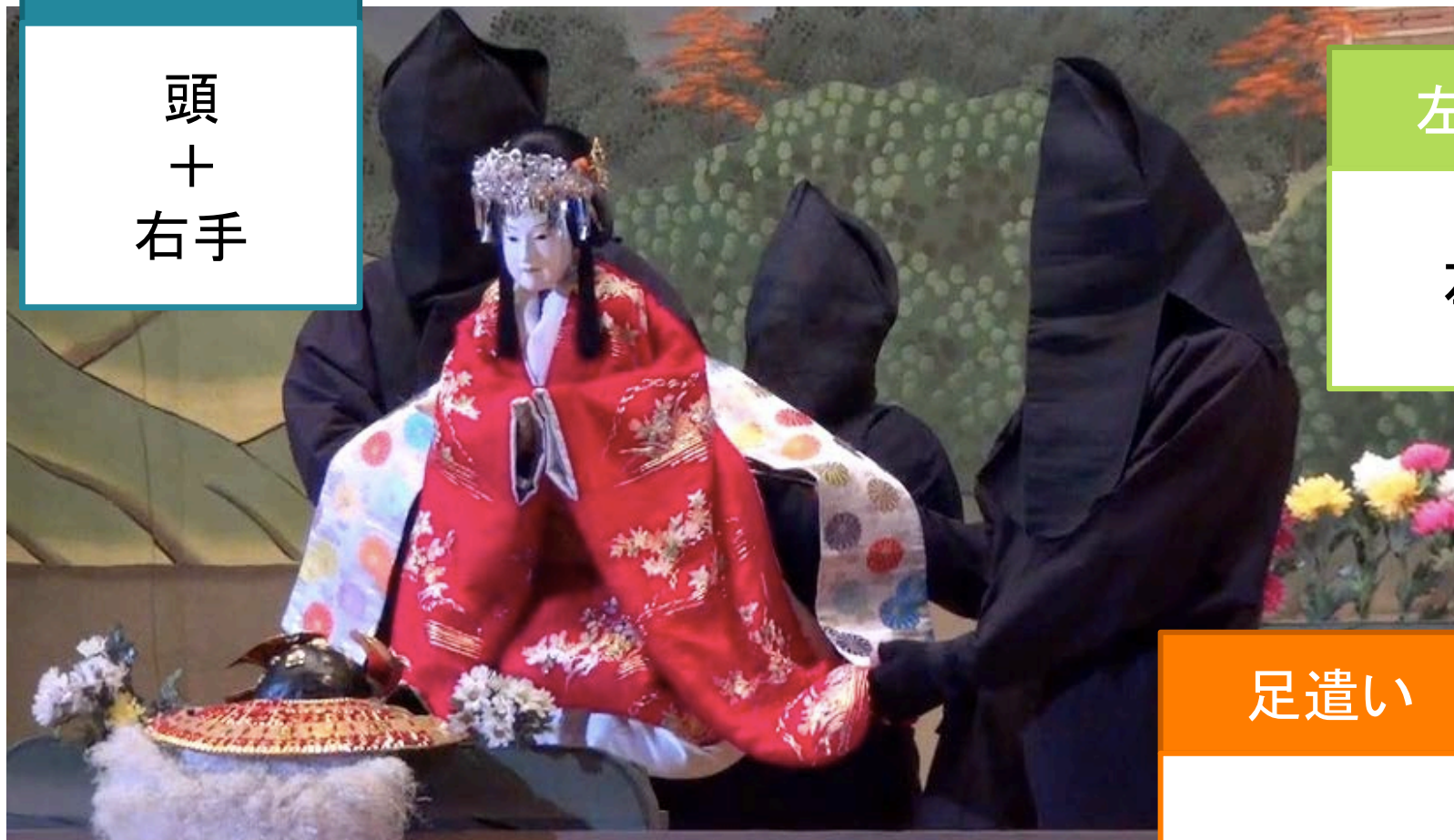
頭
+
右手

左遣い

左手

足遣い

両足

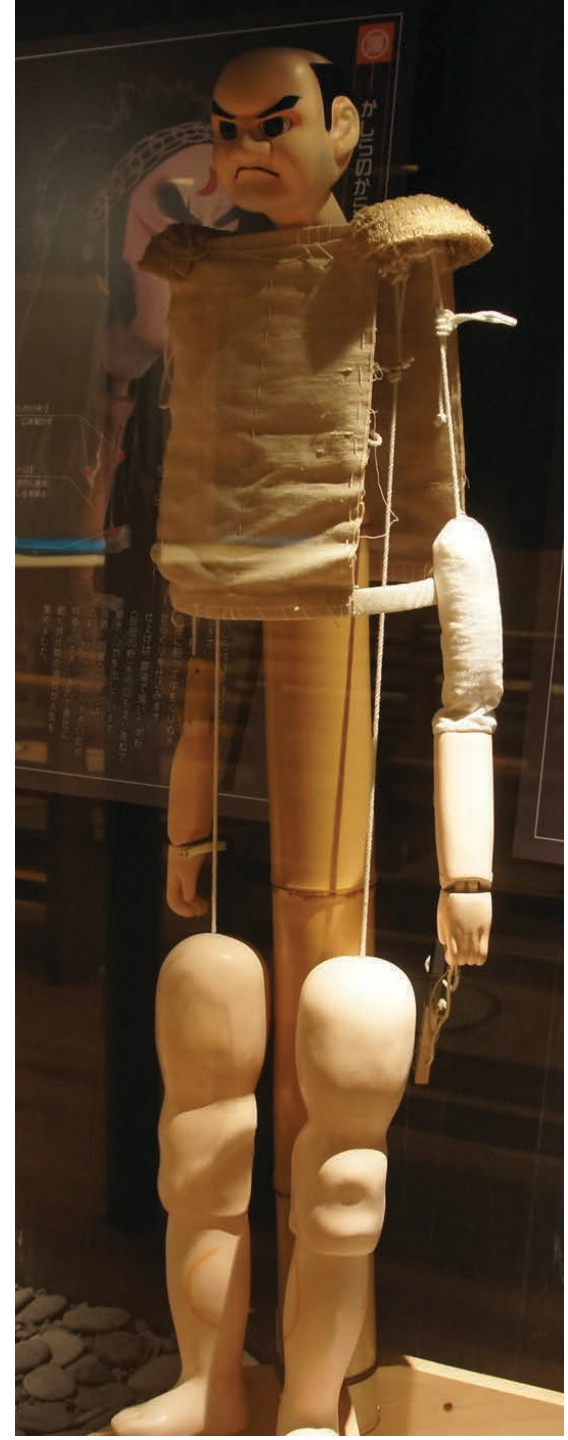


人形の構造

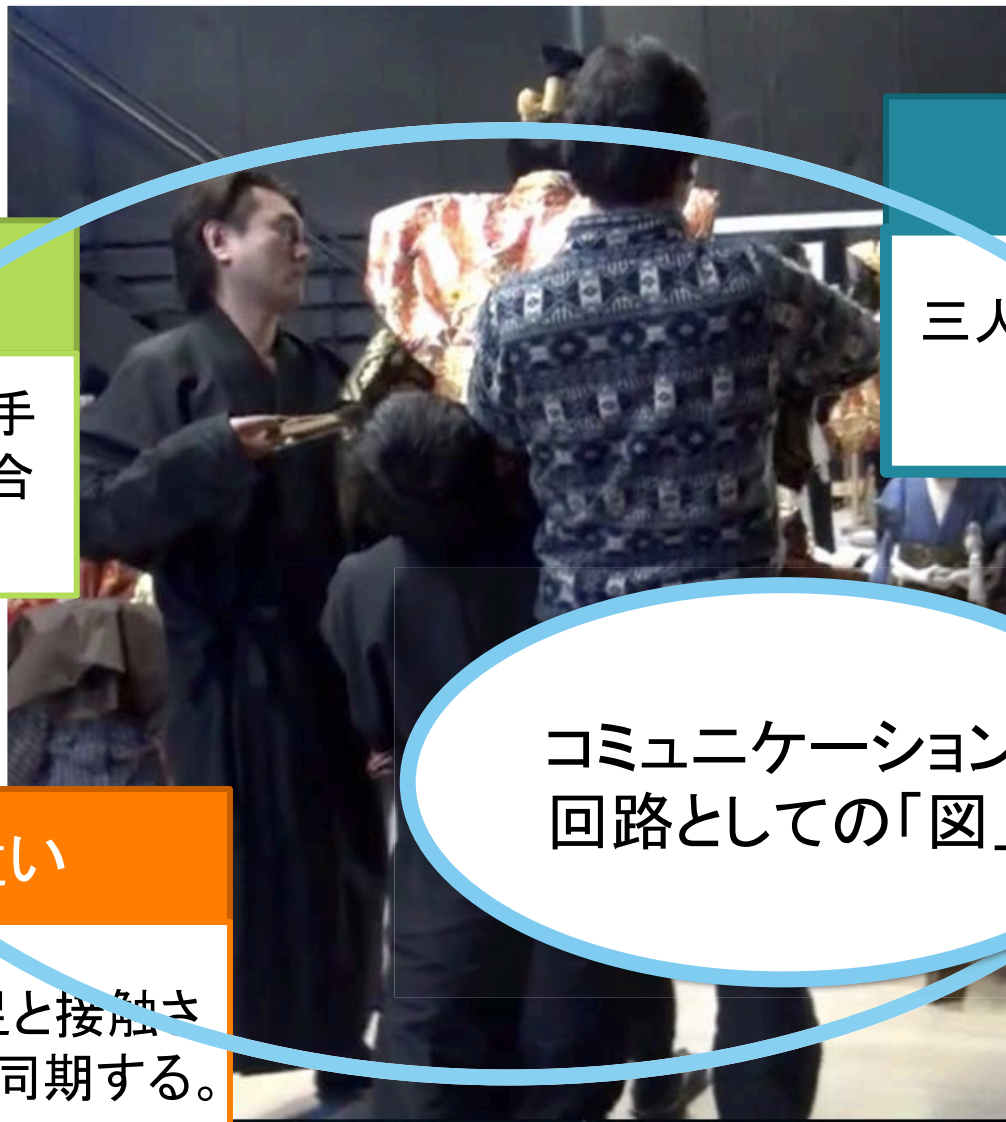
手足...肩板から紐でつり下げられる

手には「差し金」が付いており、紐を引けば手が開く。

女性の人形には足がない。衣装の裾をうまく使って演出。



三人遣いの操法



左遣い

人形の頭、肩、右手を見ながら動きを合わせる。

頭遣い

三人の動きをリードする。

足遣い

頭遣いの足と接触させ、動きを同期する。

コミュニケーション回路としての「囀」

三人遣いの身心変容論

昔の人形座：荒物方→荒物頭→足遣い→左遣い→頭遣い

今日の文楽：足10年、左10年。ようやく首。

- ・舞台の後見としてサポートし、芝居全体の流れを体得。
- ・足遣いから始め、「頭遣いの呼吸」を知る。
- ・左遣いで全体を把握。
- ・頭遣いで二人を主導。効果的な演技を実現。

「精神論」の話なのか、動作の熟達度と関係しているのか。

「発達段階」を裏付ける身体論的根拠を探る。

2. 人形操作の稽古場面

2-1. 足遣い

淡路人形座においても、足遣いは下積み段階と位置づけられている。



振り: 立ち上がる、座る。歩く。踏む。

操作: 頭遣いの足に同期。

2-1. 足遣いの稽古場面

- ・『壺坂靈験記 山の段』の一場面
- ・登場人物「沢市」が踊りだす際の振り

ポイント

- ・頭遣いが足遣いを指導(なかなか覚えられない)
- ・ゆっくり説明するうちに、頭遣いが混乱。
- ・頭遣いが実演。
- ・頭遣いが一時退出。別の頭遣いが無為に実演。
- ・頭遣いが戻り、再び実演。
- ・人形にて合わせるも、出来ず。形の修正。

2-2. 左遣い

左遣いはほぼ一人前と位置づけられている。



振り: 手を使った動作。舞。物をとる。

操作: 右手に合わせる。肩を見る。頭を見る。人形を支える。

2-2. 左遣いの稽古場面？

- ・『賤ヶ嶽七本槍 清光尼庵室の段』の一場面
- ・登場人物「足利政左衛門」の会話場面の振り

ポイント

- ・頭遣いが専門家に振りを相談。
- ・頭遣いのペースにひたすら合わせる。
- ・黙々と振りを確認。
- ・頭遣いの即興〈詰め寄る〉振りに付いていく。
- ・頭遣いの意見を聞いて修正。
- ・派手な動きを冗談まじりに提案。

2-3. 頭遣い

頭遣いは一人前。
決められた振りであっても、
修正することが出来る。



振り: 頭・胴体を使った動作。表情の変化。舞。

操作: 「**囟**」を出す。

2-3. 頭遣いの稽古場面

- ・『生写朝顔日記 摩耶ヶ 嶽の段』の一場面
- ・登場人物「荒妙」が「深雪」に折檻する場面の振り

ポイント

- ・頭遣いだけで議論している。
- ・「深雪」が逃げようとするのを「荒妙」が許さぬ、といったように作り替える。
- ・「尺」に収まるかどうか検討。
- ・振りが重ならないかどうか検討。
- ・『連獅子』の真似をして遊ぶ。

3. 三人遣いの身体論

3. 人形遣いの稽古の特徴

足遣い

- ・ゆっくり説明するうちに、頭遣いが混乱。
- ・慣れた人ほど、迷った時は自分の身体で確認。

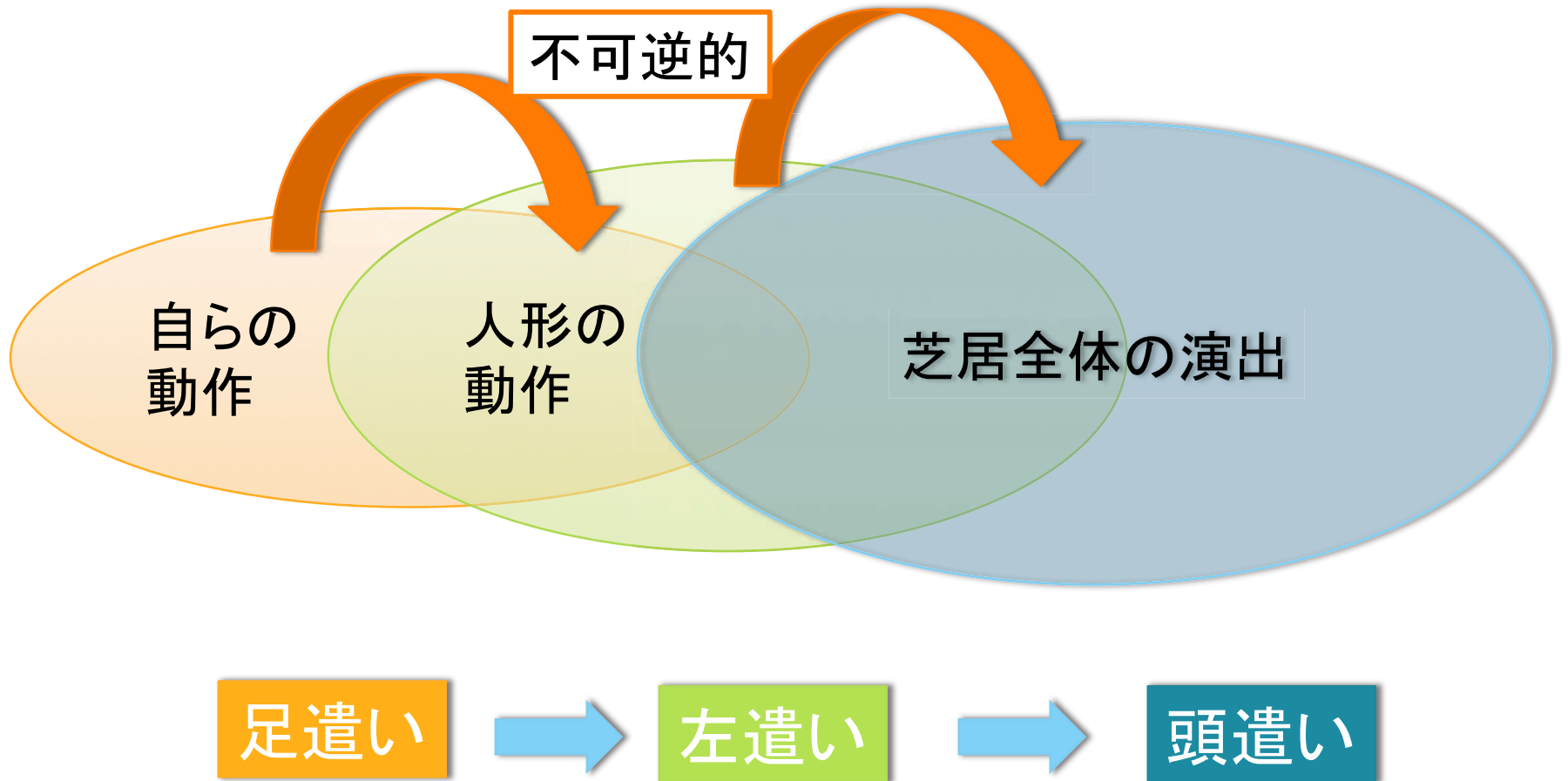
左遣い

- ・手先の振りを「図」によって伝えることはできない。
- ・振りの形や順番の確認ばかり。「図」の稽古はない。

頭遣い

- ・見せ方にのみ注意を向け、動かし方には注意を向けない。
- ・足遣い、左遣いがいなくとも稽古が成立。

3. 人形遣いの稽古の特徴



3. 自らの身体⇔人形の身体

・人形の操作を支える根拠：身体図式

「身体図式」とは、動作の型。

「身体図式」は「転調可能」である(メルロ=ポンティ)
(e.g.)ピアノからオルガン、紙とペンからチョークと黒板。

足遣い：自分の手で人形の足を稽古。

左遣い・頭遣い：自分の身体で人形の動きを模倣

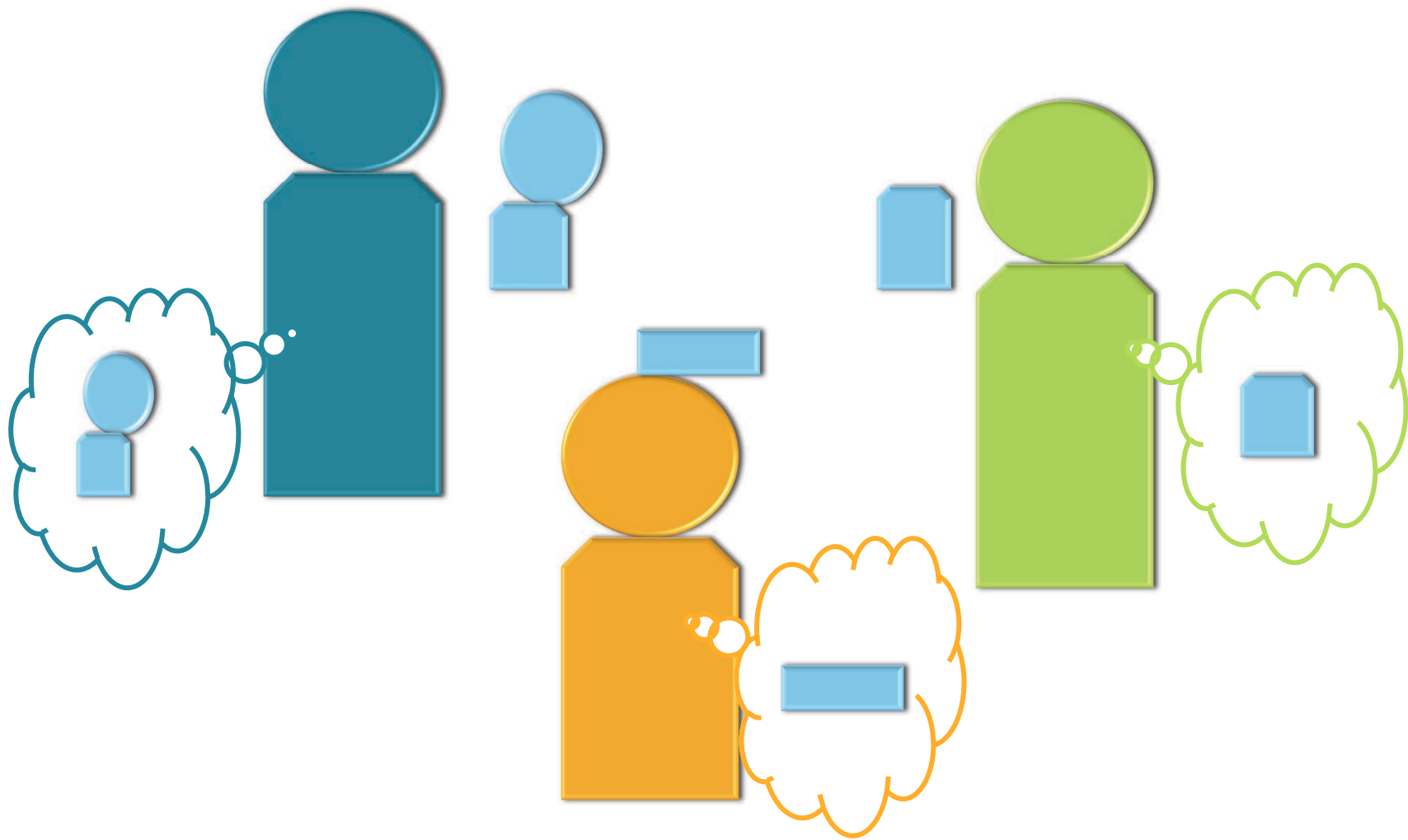
人形の操作＝自分の身体の「図式」を投影させること。

3. 三人遣いの身体論

三人の協調と役割のバランス

「見る目には三人の使い手の体の運動があたかも巧妙な踊りのごとくに隙間なく統一されてなだらかに流れて行くように見える。ただ一つの躊躇、ただ一つのつまずきがこの調和せる運動を破るのである。しかしこの一つの運動を形成する三人はあくまでも三人であって一人ではない。足を動かす人の苦心は彼自身の苦心であって首を持つ師匠の苦心ではない。それぞれの人それぞれの立場においてその精根をつくさねばならぬ。そうして彼が最もよくその自己であり得た時に、彼らは最もよく一つになり得るのである。」(和辻「文楽座の人形芝居」)

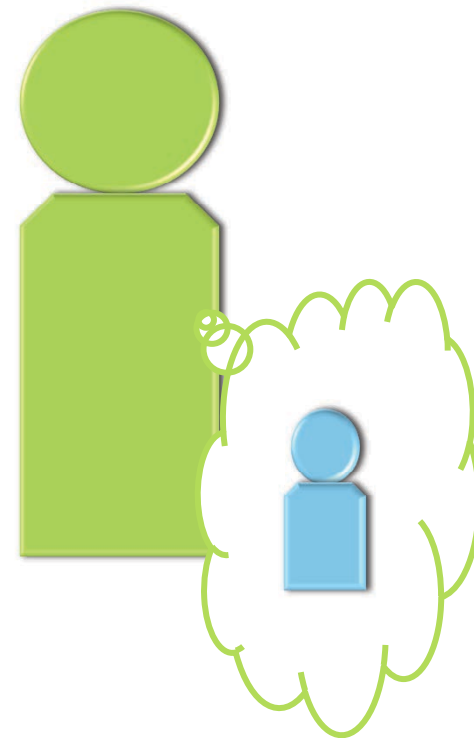
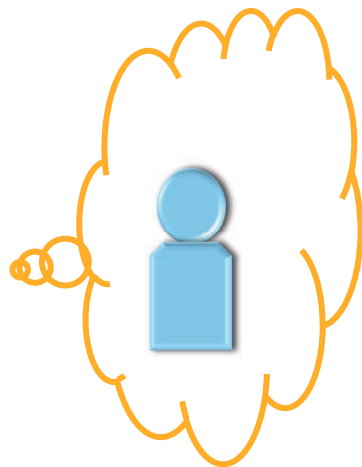
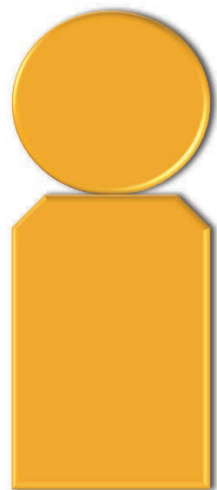
3. 三人遣いの身体論 独立した操作？



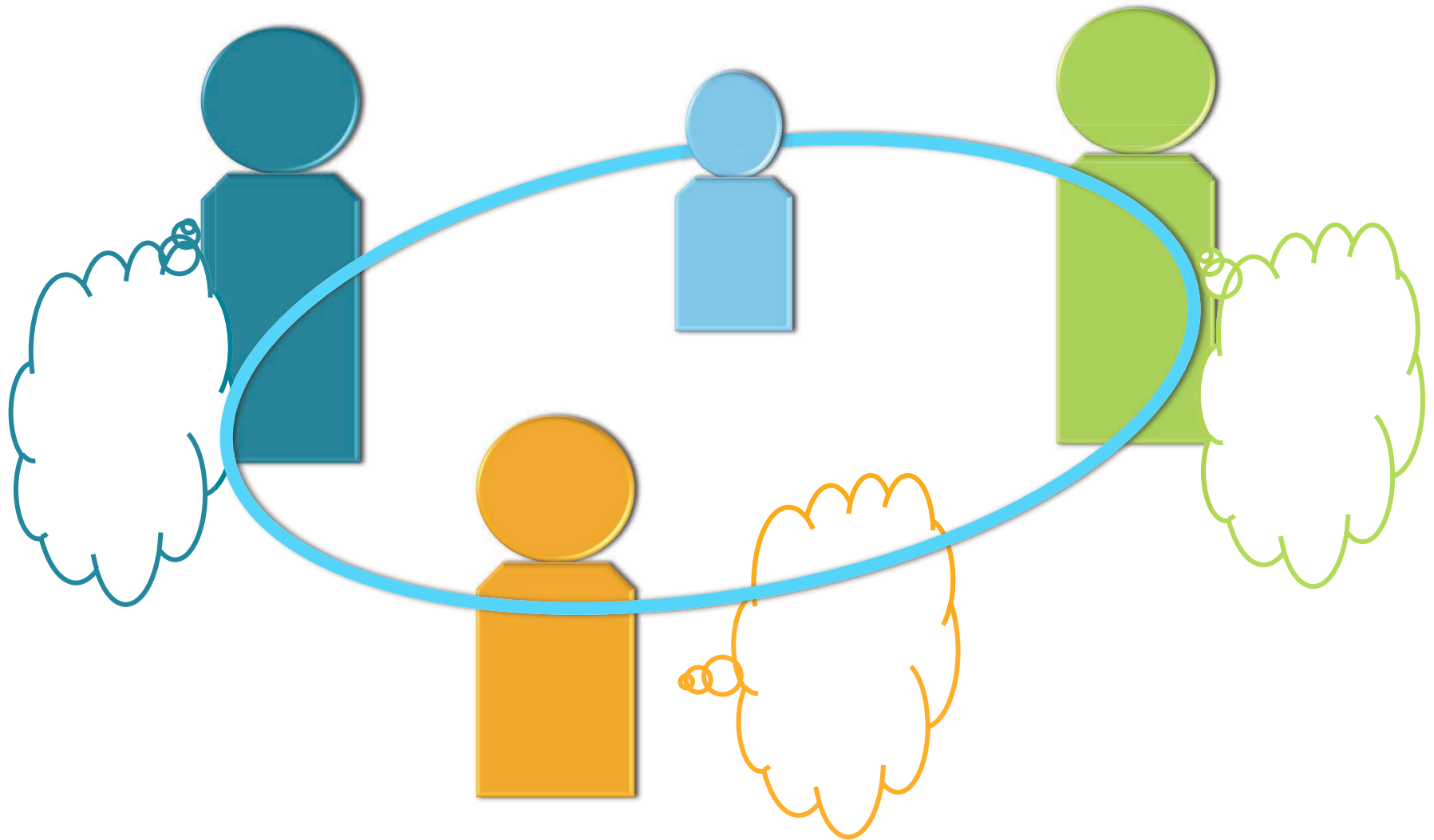
3. 三人遣いの身体論 人形遣いが消える？



3. 三人遣いの身体論 空っぽの身体図式



3. 三人遣いの身体論 空っぽの身体図式



3. 三人遣いの稽古論

- ・身体図式の投影を一致させるためには、三人のコミュニケーション(図)が肝要である。
- ・それにも関わらず、図だけを取り出して稽古することはほとんどない。実際の動きの中で、図そのものが焦点化されることは稀である。
- ・その意味で、学び方そのものが暗黙的。「学び」の明示化を試みる近代教育のあり方に、いかに立ち向かうかが課題。

参考文献

Crossley, Nick. *The Social Body: Habit, Identity and Desire*, Sage Publications, 2001. (西原和久・堀田裕子訳『社会的身体——ハビトウス・アイデンティティ・欲望』新泉社, 2012年.)

Lave, Jean., Wenger, Etienne. *Situated Learning: Legitimate Peripheral Participation*, Cambridge University Press, 1991. (佐伯胖訳『状況に埋め込まれた学習——正統的周辺参加』産業図書, 1995年.)

Merleau-Ponty, Maurice. *Phénoménologie de la Perception*, Gallimard, 1945. (竹内芳郎・小木貞孝訳『知覚の現象学』1-2, みすず書房, 1967年-1974年.)

Polanyi, Michael. *The Tacit Dimension*, Doubleday, 1966. (佐藤敬三訳『暗黙知の次元——言語から非言語へ』紀伊國屋書店, 1980年.)

淡路人形協会編『淡路人形浄瑠璃』浜田タイプ, 2002年.

生田久美子『「わざ」から知る』東京大学出版会, 1987年.

生田久美子・北村勝朗編著『わざ言語——感覚の共有を通しての「学び」へ』慶応大学出版会, 2011年.

久堀裕朗「奥州秀衡有鬘塚 鞍馬山の段」淡路人形座編『淡路人形座特別公演——人形芝居がやってくる』淡路人形協会, 2011年, pp. 2-4.

倉島哲『身体技法と社会学的認識』世界思想社, 2007年.

菅原和孝『ことばと身体——「言語の手前」の人類学』講談社, 2010年.

福島真人『学習の生態学——リスク・実験・高信頼性』東京大学出版会, 2010年
——『暗黙知の解剖——認知と社会のインターフェイス』金子書房, 2001年.

文楽協会監修『文楽の人形』婦人画報社, 1976年.

松下良平「表象の学習・生としての学び」『近代教育フォーラム』14号, 2005年, pp. 49-62.

和辻哲郎『和辻哲郎随筆集』岩波書店, 1995年.